



所 感

京都大学名誉教授

岸 本 兆 方

40年史に、名誉教授として何か書くようにとのことですが、何しろまだ名誉教授になり立てなので、それらしい実感が全く湧いて来ません。従ってまた、大所高所からの意見などはとても述べられそうもありません。ただ、ついこの間まで携わって来た研究所の仕事については、未だにいろいろと思い出したり、考えたりすることの多いこの頃ですので、それらのことについて少し述べて責をふさぐことにさせて頂きたいと思います。

防災研究所が設置された昭和26年は、私にとっては大学卒業の年でありました。そして大学を去る今年が創立40周年記念の年というわけで、防災研究所の節目の年に合わせて、私自身にも変化があるような気がします。

昭和33年、私はその年防災研究所に設置された地殻変動研究部門助教授として勤務することになり、和歌山市地域におびただしく発生する微小地震の活動状態と、震源直上で観測される伸縮や傾斜の変化との間の関係の研究を、故西村英一先生の指揮の下に始めることになりました。元来、地殻変動研究部門は、地震予知を最終目的として、主として京都大学のお家芸と言われた連続観測による地殻変動の研究を推進するために設置されたものですから、このようにして、私は現在の地震予知計画発足のかなり前から地震予知に付き合うことになったわけです。

昭和40年、ナショナル・プロジェクトとして地震予知計画が発足し、それ以来の26年間、地震予知計画と共に過ごすことになりました。特に、地震予知計画に基づく最初の仕事は鳥取微小地震観測所の観測網構築でしたが、この観測所には昭和38年度から予算が交付されており、その頃から、関係者総動員で作業が進められました。40年夏、第1期観測網は一応完成しましたが、この間の多くの人達との共同作業の経験が、地震予知の観測・研究が大変人間臭いものであるという意識を、私の内部に深く刻み込んだように思われます。つまり、防災科学というものの自体が人間社会の福祉を目的とする学問ですから人間を度外視できないのは当然なのですが、それだけではなく、地震予知研究の推進にはいろいろの、且多数の人達の協力が不可欠であるという考えが私の基調となったと言う意味なのです。ここで少し付け加えるならば、多数の人達とは単に研究する側だけのことではありません。例えば、初期の段階で観測を委託していた現地の観測点の人達も忘れることはできません、この人達の協力なしには、微小地震の常時観測は始められなかったのですから。

このように、地震予知研究を進めるためには効果的な協力態勢を作らねばならないという考え

が、私にとって最も思い出の新しい地震予知研究体制の統合化問題に取り組ませた第一の動機であったということができましよう。京都大学における地震予知体制の統合・再編成の必要性が言われるようになったのは随分古く、15年以上もさかのぼります。その頃からの経緯はこの40年史の別の場所で述べられていますから触れませんが、紆余曲折をへて、平成2年度、遂に地震予知研究センターが実現したのは御同慶の到りであります。私としても、在職期間の最後の年に実現したということは、何にも増して嬉しく、大学での最大の思い出として残ることでしょう。

この地震予知研究センターの重要な特徴の一つは、このセンターは内部に多くの研究分野（研究部門に相当）の他、観測所、総合移動観測班、総合処理解析室などを一体として包含するという点であります。すなわち、いわゆる大部門制というに止まらず、研究・観測・解析・実験などを、センター全体の有機的協力の下に行おうというもので、このような組織は恐らく初めてではないかと思われます。地球科学という学問分野は、観測が極めて重要な地位を占め、地震予知を含めてこの学問の発展は優れた観測の上のみ可能であると考えられるのですが、この意味で、当研究センターは正にバイオニアとしての使命を担ったと言うべきでありましよう。上記のような構想を実現するのは言う程易しくはないかも知れません。私は今、衷心、センター構成員の方々の御努力を期待しております。

研究と観測の協力の重要性は上述の通りですが、センターにおける観測所のあり方はその前提としてゆるがせにできない問題ですので、一言私見を述べることをお許し願いたいと思ひます。優れた観測を行うには、すぐれたアイデアと努力が必要なことはいうまでもありませんが、特に地震予知の場合のように、かなり長時間にわたり、且広域の観測網も必要とする時は、個々の観測所単独の努力では不十分であると思ひます。センターの観測所群は、お互いの地域的特質や研究目的などを考慮しつつ、全体的な観測の企画や運営、更には人的問題についても、全センター的視野において考えるべきでありましよう。それがセンターの観測所の今後の発展に対する必要条件ではないかと考えるのであります。

さて最後に、防災研究所の附属施設としての地震予知研究センターという点について触れたいと思ひます。防災研究所は、理学と工学の協力によって自然災害の学理を究め、その防止・軽減を図ることをもって設立目的としております。従って地震予知は自然災害科学の一環として位置づけられると共に、地震予知研究センターは他の関連する災害の研究部門とも十分に協力して、包括的な自然災害防止を目指さなくてはなりません。私は、センターの構成員の方々が、単にセンターという組織のことだけ、あるいは地震予知ということだけに止まらず、より広く、防災研究所のことをも考えて下さることを望みます。

何やら、私はセンターに対していろいろと注文をつけ過ぎているかも知れません。しかし、それは発足したばかりの地震予知研究センターの今後の発展に対する私の念願のさせることと御容赦下さい。そして、50年史の編纂されるであろう日に、もしまだ元気で居るとすれば、すばらしい発展を遂げたセンターを見たいものであります。